

祖父を救った税金の力

北見市立南中学校 三年 鈴木 悠人

去年のある暑い日の午前中、祖父が庭の掃除の合間にベランダに腰かけて体を休めていた時だった。祖父が急に倒れた。僕は二階で本を読んでいたので、その事にはすぐには気がつかなかつた。幸い、家族や帰省していた親戚がその時は祖父の側にいたので、すぐに胸骨圧迫を始めて救急車を呼んだとのことだった。結果、祖父は一命を取り留め、すぐに回復した。

僕は今でもあの日、家の前に停まつた救急車の音を鮮明に覚えている。あの時、僕が家中がやけにバタバタしている事に気がついて急いで一階に降りると、玄関の横の窓の網戸ごしに祖父が担架で救急車の中に運びこまるのが見えた。家族に事情を聞くと、祖父が庭の掃除中にハチを刺激してしまい、何カ所も刺されてしまつたらしい。これも後から聞いた話なのだが、付きそいで病院まで行つた親戚は、病院の先生に、救急車を早く呼んだから助かつた、ということを言われたらしい。

救急車。僕は小さい頃から救急車や消防車が好きで、サイレンが鳴つたらどの車両かと窓の外をよく眺めていた。そのときはまだ、自分の家族が救急車で運ばれるなどという事は全く想像もしなかつた。そのとき僕は改めて、二階でただ本を読んでいた自分の無力を実感した。そして助けに来てくれたが顔も見えなかつた隊員に心の中で感謝した。

彼らはいつも、生死の際を彷徨う人々を、力のかぎり助け続けるのだ。しかしそんな彼らも救急車も、動くには生きしていくための給料が、燃料を買うためのお金が必要なのだ。それらを賄い、間接的に人々をサポートしてくれるのが、税金である。この出来事の前まで、僕は税率アップ、という言葉を聞くたびに嫌そうな顔をする大人たち、そして自分を見てきた。しかし、今回の出来事を通して、僕は税金についての考え方が少し変わつたと思う。普段の何気ない買い物で支払う税金。それが巡り巡つて誰かの命を、自分や家族の命を救つてくれるかもしれない、と考えられるようになったのだ。このことをより多くの人に改めて感じてほしいと僕は思う。